

曹洞宗海晏山宛陵寺季刊紙

創刊号

はすのは

平成17年1月8日

発行人 浦辺世紀

発行所 海晏山宛陵寺伝道部 〒859-4527松浦市今福町仏坂免958宛陵寺内

電話；0956-74-0139 FAX；0956-74-1170 e-mail；cent@fine.ocn.ne.jp



晋山式集合 真より(H16.11.6)

コラム

龍水

「海晏の門戸、八字に打開す。放閑千古、雲煙を吐納す。」

この言葉は晋山式の折
り、新命方丈（私）が山
門より足を踏み入れる
時に発した言葉です。意
味は「海晏山宛陵寺の山
門は八の字のようにすで
に大きく打ち開かれてい
る。千年もの昔より静か
にたたずむこの門から
は、雲や煙のごとく、た
くさんの仏の教えが外に
溢れ出たのだらう。」
と、この寺院の存在の大
きさを讃えたものです。

「今福に宛陵寺あり」
と言われるよう、存在感
のある寺になりますよう
に。（世）

「ご挨拶」

宛陵寺世二世新命 浦辺世紀

皆様におかれましては、健やかに新しい年をお迎えのことと拝察申し上げます。

私儀

この度、檀信徒の皆様方の篤い拝請を賜りまして、護持会役員・実行委員の方々のご高配と、菩提親の田中亨様郁子様御夫妻の御慈愛のお陰を持ちまして、海晏山宛陵寺の世二世として晋山させて戴くことができました。

十一月六日当日は、準備万端整った中に、皆様方には諸々のご多用を枉げて、遠近を問わず御尊来を頂き、加えて過分なる御祝賀を賜りました事、誠に有り難く厚く御礼申し上げます。このように無事円成出来ましたのも、仏天の御加護と皆様の御法愛の賜と、心から感謝いたしております。しかしながらその節は、混雑に取り紛れて十分な御礼もできず、大変失礼いたしました。何卒御海容下さいますようお願い申し上げます。今後とも御法愛を御分下されば幸いに存じ上げます。

さて、この度これを縁に、長年想い抱いておりました「寺報の発刊」を発願致しました。当分一年に四回、季刊という形で発行したいと考えております。「はすのは」という題は、慈眼堂に奉安した威徳観音が、蓮の葉に座っておられるところから名付けました。様々な情報の発信と、寺と檀信徒の橋渡しにしていきたいと思います。多くの方に親しく読んで頂けるよう、工夫していきたいと思っておりますので、どうぞ宜しくお願い致します。

晋山記念として差し上げた「曹洞宗宛陵寺要典」の中のお経を現代文に直して、毎回掲載します。

●南無釈迦牟尼仏（経典 4 ページ）

「最上の真理の具わった仏陀の教えに、身も心も信じきり、その導きに順って実践してまいります。」

※南無とは〈絶対の信頼〉という意味。牟尼は最高。仏は仏陀（ブッダ）のことで悟りの者という意味。

●開経偈（経典 4 ページ）

「この上もなく深くすぐれた仏の教えには、永い時間や月日を経てもなかなか出逢えないのもですが、私は今その仏法を見聞し、手に頂くことができました、どうぞ仏法の本当の真理が理解できますように。」

※ここに経典を頂くにあたり、もらさずその功德が行き渡るように念ずる言葉。

経典をよむ

出来事あれこれ

成道会

十二月八日は、釈尊「成道会」を修行しました。

いまから二、五三六年前、インドのブダガヤの地において、この命の真実の姿を、人のわがままを超えて明確にさとられたお釈迦様の存在を、心から敬う大法要です。古来は月暦（旧暦）でしたので、正しく日を見ると一月十七日になりますが、おおかた現代のカレンダーによって行っています。

当日は二百名ほどの参詣者で本堂もいっぱいになりました。三年前から「転読大般若祈祷」を合わせて勤めています。これまで行っていた「先祖の塔婆供養」に代わり、お参り頂いた方々の「健康と繁栄」を祈願する法要であり、いわば「生きた人間の法要」であります。

数名の僧侶の随喜で、六〇〇巻の大般若経を勢いよく転読してお参りの方々の肩をこの経典で一人お一人叩いて頂きます。大変賑やかな法要であります。

更に、法要後のお説教は、江迎町田の元の、清浄寺東堂老師にお願い頂き、笑い有り涙有りの中に、人生の指針をお示し頂きました。老師の味わい深いお示しに、本堂の中はタイムスリップをしたかのような、あつという間の充実したひとときを過ごしました。

次回もたくさんのお参りをお待ちしております。

これからの御案内

涅槃会

二月十五日（火）午前十時より、釈尊「涅槃会」を修行します。お釈迦様のお亡くなりになったお命日であります。

それぞれのご先祖のお命日も大切ですが、そのご先祖をお護り下さっている、お釈迦様のお命日はいかばかりか大切に勤めるのが、仏教徒の正しい道であります。

今回は、法要後に「晋山式」のビデオ放映を計画していますので、皆様にはご多用のことと存じますが、万難を排してどうか多数ご参詣下さい。

春の彼岸

三月二十日（日）午前十時より、「彼岸中日法要」を修行します。多数ご参詣下さい。

三月廿二日（火）午前十時より、「授戒式」を修行します。戒名を授かり、仏弟子としての自覚と安心を頂き、命いっぱい生きるための儀式です。希望の方は事前にご予約下さい。

八日講

今年より、六月と十月も「お八日講」を厳修致します。ただし屋のお齋はありません。法要のみお勤めいたしますのでお参り下さい。いわゆる、毎月必ずお寺参りの縁を作らせて頂きました。



(記念撮影)



(首座和尚の禅問答)



(法戦式)



(自身が仏となって壇上より法を説く)



(総回向での行道)



(高橋護持会長の謝辞)



(西堂老師の説法)

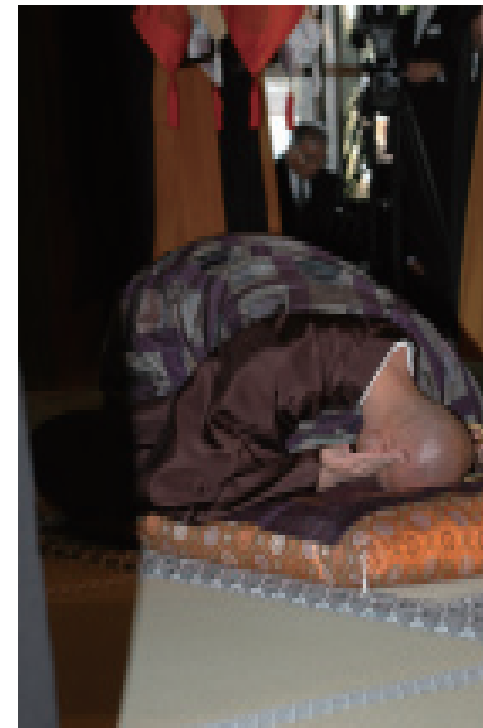


(梅花講員の皆さん)

海晏山宛陵寺
晋山式
フォトグラフィ
平成16年11月6日



(早朝、菩提家にて)



(糞掃衣を戴いて、御本尊に三拝)



(晋山行列)



(菩提親のお二人)



(かわいい稚児さん)

仏事の深意 「お通夜」 第1回

お通夜は告別の場ではありません

仏教的に申しますと、臨終の直後は、生命活動が停止していてもまだ完全に死に至った訳ではありません。限りなく死に近づいてはいるものの、まだ息を返す可能性を持っているのです。完全な死とはいっつか？ それは、告別式の「引導法語」の瞬間です。そう信じてつとめています。

葬式の前の晩を通夜といいます。「しにかけて」いる人を、夜を徹して見守りながら、縁の有り難さを心に刻む時間です。できることなら生き返って欲しいと祈る時間です。最近、この真心の時間に《喪服を着て香典を差し出す》心のない人達が増えてきました。

告別とは「完全に離別を宣告する」事です。その時に初めて喪服を着て香を薫じるのです。お通夜はあくまで告別式とは全く意味の違う「身内の時間」なのです。ですから本来お通夜は、
○プライベートな時間なのでよほど親しくない限り控える。

○喪服は着ない。香典はしない。
○読経はしない。

だったのです。そうであって初めて告別式も意義深い儀式になるのだと思います。

「葬式には仕事休んでまで行けんから、お通夜で香典上げとこう」という心無い弔問は、もうそろそろ控えるべきだと最近強く感じます。お通夜で弔問客の対応に追われ、疲れ切って当日の葬式でいねむり・・・有ってはならぬ事。

祥月命日の回向を致しましょう

三仏忌・彼岸会・八日講でご先祖の「祥月命日」の回向を勤めることに致しました。
毎月行う公式法要の中で卒塔婆（ソトバ）を書いて戒名を読み上げてご回向させていただきます。
合同回向となりますが、敬しい法縁と思われまはす。
是非ご参加下さい。随時受け付けます。

回向料・・・五千元（卒塔婆代含む）

訂正とお詫び 年末にお配りしました「年忌早見表」で、十七回忌 昭和六十四年は、平成元年に訂正をお願いいたします。お詫び申し上げます。

文責 宛陵寺住職 浦辺世紀